

マルサス＝ゴドウィン人口論争の一展開

——マルサスのゴドウィン宛書簡(1798年8月20日)を中心に——

啓明学院中学・高等学校教諭 中野 力

1. はじめに

ウィリアム・ゴドウィン(William Godwin, 1756-1836)の文筆活動は1783年の大ピットの伝記から始まるが、彼の名を一躍高めたのは『政治的正義』であった。この著書を執筆した時期はフランス革命が勃発した後であり、彼はフランス革命に大いに期待を寄せていた。

ゴドウィンは1797年には『研究者』を出版する。『研究者』は教育論に加えて、富や貧困、食欲や浪費について論じるなど、『政治的正義』よりも多角的な視野から議論が展開されている。

この『研究者』の「食欲と浪費について」に触発されたのがトマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834)であった¹。マルサスは1798年に『人口の原理に関する一論——将来社会の改善への影響との関連で——付論としてゴドウィン氏、コンドルセ氏、およびその他の著作家たちの思索に言及する——』を出版する。副題にあるように、マルサスの意図はゴドウィンたちの批判にある。ゴドウィンは政治制度を改革すれば人類は進歩していくと考えるのに対して、マルサスは過剰人口論を展開し、平等社会が現実成立してしまえば、等比数列的に増加する人口と等差数列的にしか増加しない食料との関係から、過剰人口に陥って平等社会は崩壊すると論じる。このようにマルサスは人口問題からゴドウィンを批判したのである。

このような中、1798年8月20日マルサスからゴドウィンに手紙が届けられている。この手紙はゴドウィンの手紙に対する返信と考えられている。残念ながら手紙はこのマルサスからゴドウィンへの手紙しか残されていない。それでも、この手紙だけでも二人の思想の差異が端的に理解できる。

手紙で展開されるマルサスからの批判を受けて、ゴドウィンは1801年に『諸考察』を執筆する。これは大著であった『政治的正義』や『研究者』とは異なり短い説教であるが、この中でゴドウィンはマルサスを批判している。

マルサスは『諸考察』でのゴドウィンの批判を受けて、道徳的抑制を認めるようになる

¹ マルサスは『政治的正義』も目を通しており、『人口論』初版中に『政治的正義』のタイトルがあがっている。

ものの、それでも根本的な見解を変えることはなかった。マルサスは 1798 年の『人口論』初版の後、1803 年には第 2 版、06 年には第 3 版、07 年には第 4 版、17 年には第 5 版を出版していく。しかしながら、マルサスのゴドウィンへの関心はもはや初版ほどではなかった。第 2 版以降では副題にあげられていたゴドウィンたちの名前が消されているし²、第 5 版ではコンドルセやゴドウィンへの関心は大いに失われたと述べている³。

このような状況に対して、ゴドウィンは 1820 年に『人口について』を出版して、マルサス批判を行う。しかしながら、ゴドウィンのこの著書の評価は芳しくなかった。

1826 年に出版された『人口論』第 6 版の最後にはゴドウィンに抗弁するのは不愉快であるとマルサスは述べて相手にもしていない⁴、『エディンバラ・レビュー』に匿名で書かれた記事では⁵、「高名な著述家[ゴドウィン]の筆になるこれまでに最も貧弱で、かつ最もかまびすしい作品(the poorest and most old-womanish performance)」(Anon. p.362, 邦訳 316 ページ)だと酷評している。

以上までがゴドウィンとマルサスとの人口論争の一連の流れである。本報告では 1798 年 8 月 20 日の手紙に焦点を当てながら、二人の思想について論じていく。

2. ゴドウィンのユートピア

2-1 『政治的正義』

ゴドウィンが『政治的正義』で主張するのは平等な社会である。特に商業社会においては貧富の格差が大きくなり、貧民は大いに苦しむこととなる。この貧困の格差の是正こそゴドウィンが目指したものであった。

ゴドウィンは富者の慈善に頼って平等に近づけようと試みるのではなく、制度として平等社会を設立させようとする。平等な社会が設立されると、そこにおいては罪や戦争はなくなる。犯罪は貧富の差があるからこそ生じるのであり、平等な社会が成立すると、幸福な社会が到来するとゴドウィンは考えていた。

2-2 『研究者』

『研究者』は『政治的正義』では展開されなかった議論が多くみられるが、それでもゴ

² *An Essay on the Principle of Population; or, a View of its Past and Present Effects on Human Happiness; with an enquiry into our Prospects respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions* が『人口論』第 2 版以降のタイトルである。

³ Malthus (1817), vol. 2, p.271, 邦訳 77 ページ。

⁴ Malthus (1826), vol. 3, p.623, 邦訳 697 ページ。

⁵ 匿名ではあるが、マルサスだという説もある。この記事の詳細は Anon. (1821), 柳田訳 (2008) を参照。

ドウィンの思想が大きく変わったわけではなく、本質的には同じ思想に基づいている。『研究者』で有名な議論が、「食欲と浪費について」であり、この論考を読んだことにより、マルサスが『人口論』を執筆したと考えられている。『研究者』でも『政治的正義』と同様に平等な社会を目指すことが論じられる。

ゴドウィンは「食欲と浪費について」で、食欲と浪費のどちらが正義の原理に近いかという問いを立てる。ゴドウィンは、浪費は労働者の労働を増すだけで、賃金の上昇が生じないので、食欲な行為のほうが望ましいと結論づける。

3. マルサスのゴドウィン批判

3-1 人口理論

このようなゴドウィンの思想に対して、マルサスは『人口論』を出版し、ゴドウィンを批判する。マルサスの著書のタイトルにあるように、批判の主眼は人口論にあった。マルサスは人口と食料との関係を持ち出す。食料は等差数列的にしか増加しないが、人口は等比数列的に増加する。かくして、世界は食料不足に陥る。マルサスはこの見解を決して理論上のものとみなしていたのではなく、現実には世界は食料不足に陥っていると考えていた。特にゴドウィンは平等社会の観点から、小土地所有を主張する。しかしながらゴドウィンの考えるような平等社会がもし成立すると、その社会は人口増加にとって適しているために、ますます人口の抑制が難しくなってしまう、最終的には過剰人口から平等社会は崩壊することになる。

3-2 食欲と浪費

『研究者』の「食欲と浪費について」を読んで、マルサスが『人口論』を執筆したことにより、人口理論に加えて、食欲と浪費もまたマルサスの議論の対象となった。マルサスはゴドウィンとアダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)との見解を比較考察する。スミスは倹約による貯蓄が資財を増加させるとして、国の利益となると考える。それに対してゴドウィンはスミスと同じように倹約を奨励するものの、それが国の資本として用いられることを意味しなかった。マルサスから見るとスミスの議論は経済的であるのに対して、ゴドウィンの議論は道徳的なものである。マルサスにとってこの両者の差異は非常に大きなものであった。

4. マルサスからゴドウィンへの手紙

マルサスの『人口論』が出版された後、マルサスとゴドウィンは手紙を交わすことになる。残念ながら今残されているのは、マルサスからゴドウィン宛の一通だけでしかないが、

それでもこの手紙でもゴドウィンに対するマルサスの見解が述べられており、マルサスの思想を知るうえで重要なものである。

「……。 さて、あなたが問題提起した見解によりますと、完全性や幸福の問題から、人間の数の問題へと、ある程度の変化がみられるのではないのでしょうか。永遠に幸福が増加することもないのに、将来の状態について注意を払うこともなく、人口の増加が本当に望ましいということは、疑わしいことのように思われます。

……。 人口増加を抑制するものとしてあなたが語っておられる慎慮は困難の予見を意味しています。そしてこの困難の予見は、その困難を取り除きたいという願望を必然的に意味します。これらの困難を取り除きたいという自然で一般的な願望が、社会の必要な労働を等しく分割するためのあらゆる機会をつぶしてしまうような競争を引き起こすこともないし、私がすでに述べたような状態を生み出すこともないのだ、という適切な理由を私に教えていただけませんか。もしこの問題についてあなたが私の疑問を解消していただけるのであれば、あなたが行っておられる労働が増加することに対しての非難についても、貪欲と浪費についてのあなたの試論の全般的な意見についても、心からあなたに賛成しましょう。細かい議論に入ることをお許してください。といいますのも、われわれの研究の重大な目的である真理は、そのことなしには手に入れることができないと私は考えるからです。

現在の社会構造が実現可能な最大数の人口増加を妨げるものであるという理由から、あなたは現在の社会構造に反対しておられますが、それはあなたの慎慮の理論、すなわち、私の想像するところでは、生活資料の範囲内に人口を常にとどめておこうとするのがその目的だと思うのですが、その理論に若干反するのではないのでしょうか。もしそういう理論が一般に行われて、食物の量を増加させる必要もないことになれば、耕作が現在よりもさらにゆっくりと行われるようになる、ということが大いに考えられます。私が現在の社会構造を是認するのはとても簡単な理由で、正しい学説の法則に従う限り、個人の自由と衝突せずに、文明と人口とを等しく進めていくような構造は、他にはないと考えるからです。社会状態に大きな改良が生じることはありえるでしょう。しかしながら、未開状態に逆戻りするような危険もなしに、どのようにすれば現在の構造や制度を、根本的に、本質的に、変えることができるのか私にはわかりません。人間の制度について現在認められている不完全性にもかかわらず、社会で感じられる苦痛のほとんどがこの不完全性から生じるとは私には決して考えられません。過剰人口から生じる不幸

を防ぐためには慎慮が必要であるということを確認すること自体が、責任を社会の制度から個人の行動へと移すものではないでしょうか。……」(Paul 1876, pp.321-325, 傍点は原文のイタリック)。

マルサスは手紙でゴドウィン批判を展開している。その根幹となるのは人口理論であった。マルサスは人口が等比数列的に増加するのに対して、食料は等差数列的にしか増加しないと考えるので、平等社会は最終的に過剰人口に陥ってしまう。しかしながら、マルサスは頭ごなしに平等社会を批判するのではなく、元来平等社会は望ましいものであるという前提をゴドウィンと共有している。もしゴドウィンの考える平等社会が成立して、マルサスの考えるような過剰人口も生じなければ、ゴドウィンの見解が正しくなり、「食欲と浪費について」で行われた議論ですら、ゴドウィンが正しくなるとマルサスは認めている。それゆえ、この議論から「食欲と浪費について」の議論よりも人口論の議論のほうが重要であることが読み取れる。しかしながら、マルサスにとっては平等社会での人口抑制は難しいものであった。

またほかに重要となるのが慎慮(*prudence*)についてである⁶。マルサスは『人口論』第2版で人口抑制手段として道徳的抑制を加える。道徳的抑制とは自らの考えで結婚を慎み、道徳的な行為を順守するもので、広義の慎慮(*prudence*)に属するものである。マルサスは道徳的抑制を『人口論』第2版以降で加えているものの、ここでは慎慮そのものの効力に疑問を呈している。それゆえに、マルサスはゴドウィンの平等社会に共感を抱いているかのように書いてはいるものの、人口が抑制されない限り、ゴドウィンの考えるような平等社会は不可能であると論じたのである。

5. 『諸考察』

マルサスからゴドウィンに手紙が送られた後、ゴドウィンはマルサスを批判する説教を1800年に行う。翌年にその説教が出版されることとなった。

ゴドウィンは人口の等比数列的増加を認めているが、それは新興国に限られており、ヨーロッパではこのような人口増加が生じていないと考えている。ゴドウィンはマルサスと

⁶ 慎慮という言葉は『人口論』初版でも見られる。「もっとつよい情念によってか、あるいはもっとよわい判断によってかのいずれかによって導かれる他の人びとは、これらの制限をつきやぶるが、道徳的な愛のようなきわめてこのましい情念の満足が、それにとまなうすべての害悪をとくとしてせいぜい相殺するだけでしかないとすれば、それは、じつにつらいものであろう。しかしわたくしは、このような結婚のもっと一般的な結果は、慎慮(*prudent*)あるものの予感を抑制するというよりは、むしろそれを正当化するものであることが、みとめられなければならないとおもう」(Malthus 1798, p.27, 邦訳 51-52 ページ)。

は違って、現実問題として過剰人口が危機的な状況にあるとは考えなかった。ゴドウィンはマルサスの人口法則を認めていなかったといってもいいであろう。

ゴドウィンは人口抑制についても述べている。その一つが慎慮(*prudence*)であった。ゴドウィンとマルサスとの見解の相違は人口論にある。マルサスが手紙で人口問題を克服できたら食欲と浪費の議論についても認めると述べているように、マルサスにとって過剰人口は必然であった。しかしながら、ゴドウィンは人口問題は慎慮によって避けられる問題であり、それならば現実社会よりも平等社会のほうが望ましいと考えたのであった。

さらにここで注目しておくべきことは、マルサスが『人口論』初版で「食欲と浪費について」の批判を行ったことに対するゴドウィンの反論が行われていないことである。手紙で考察したようにマルサスは「食欲と浪費について」批判よりも人口論の観点からの平等批判に重きを置いていたので、ゴドウィンも人口論に焦点を当てたのであろう。それゆえに、手紙は『人口論』初版と『諸考察』をつなぐものとして重要である⁷。

6. 『人口論』第2版以降のマルサス

1801年に『諸考察』が出版された後、1803年にマルサスは『人口論』第2版を出版する。

マルサスはゴドウィンの批判を受けて道徳的抑制を加えるけれども、それで人口を抑制できるとは考えなかった。マルサスは『人口論』初版での人口抑制策として、予防的抑制と積極的抑制の二つを挙げている。予防的抑制とは理性による抑制であり、積極的抑制とは病気や貧困による抑制である。道徳的抑制を新たに追加したとしても、それは予防的抑制の一つでしかなかった。

『人口論』第2版で道徳的抑制を加えたものの、それでも道徳的抑制を包含する予防的妨げが『人口論』初版から存在したことは、マルサスの議論が大きく変わっていないことを、さらに言えば、ゴドウィン宛の手紙で述べた慎慮の効力への疑いが拭い去れなかったことを示しているであろう。

7. 最後に

ゴドウィンは『政治的正義』で平等社会について論じ、『研究者』で「食欲と浪費について」を論じる。この「食欲と浪費について」は特にマルサスに影響を与え、これによってマルサスは『人口論』初版を執筆するに至った。マルサスの『人口論』初版では平等社会と「食欲と浪費について」の両方を批判する見解がみられる。しかしながらマルサスから

⁷ マルサスは『人口論』第2版で「食欲と浪費について」の議論を削除している。

ゴドウィンへの手紙を読むと、等比数列的に増加する人口と等差数列的にしか増加しない食料との関係が本質的な問題であり、「食欲と浪費について」の議論は人口問題に比べると重要度が落ちるように述べられている。ゴドウィンもそれを理解していたのであろう。『諸考察』で行ったマルサスの反論では、ゴドウィンは人口論について議論を展開しており、「食欲と浪費について」の議論については反論を展開していない。マルサスは『人口論』第2版ではこの議論を削除し、論争の焦点から外している。二人の議論で「食欲と浪費について」が削除されるのは、手紙で展開された議論を考察することによって理解できるものである。

ゴドウィンは『諸考察』で理想社会についての議論を展開し、小土地所有制を中心とした平等社会を主張する。人口法則については、彼はマルサスの等比数列的増加を部分的に認めるものの、新興国に限定し、ヨーロッパの古くからの国々ではそのような議論はあてはまらないと主張する。彼は人口抑制として、幼児死亡が多いことに加えて慎慮の役割を重視する。

マルサスは『人口論』第2版で新たに道徳的抑制を付け加える。これはゴドウィンの影響を受けたものと考えられる。しかしながら、これは『人口論』初版で論じた予防的抑制に含まれるものでしかなく、人口抑制策として十全に役立つものではなかった。慎慮が人口抑制に役立つことに対しての疑いはすでに手紙でも見られたものであった。手紙では慎慮が人口抑制に役立つことに対して懐疑的であったマルサスは、『人口論』第2版でその議論を展開させるものの、決してゴドウィンほどの役割を認めなかったのである。

マルサスは人口理論を展開させることで、ゴドウィンの平等社会を批判する。ゴドウィンの小土地所有制を中心とした平等社会がひとたび成立すると、人口増加を抑制することができず、過剰人口から平等社会が崩壊するというものであった。この人口論によってマルサスはゴドウィンが批判した財産制度を擁護したのである。『人口論』初版のマルサスの主要な意図はここにあったと言える。

本報告は特にマルサスからゴドウィンへの手紙に焦点を当てたものである。それによってゴドウィンが反論を行った『諸考察』とのつながりがわかり、またゴドウィンやマルサスのほかの著作とのつながりも見えてくるようになったと思われる。

主要参考文献

Anon. (1821), 'Review of Godwin on Malhuts', in *Edinburgh Review*, vol. 35, no. 70, pp.362-77.

柳田芳伸訳(2008)「ゴドウィンの『人口について』を評す」『長崎県立大学論集』第41巻4号、309-338ページ。

Godwin, W. (1793), *An Enquiry Concerning Political Justice and its Influence on General Virtue and Happiness*, in *The Political and Philosophical Writings of William Godwin*, vol. 3, rep., William Pickering, 1993.

加藤一夫訳(1930)『政治的正義』春秋社。

—— (1797), *The Enquirer*; in *The Political and Philosophical Writings of William Godwin*, vol. 5, rep., William Pickering, 1993.

片岡徳雄・住岡英毅・山根祥雄訳(1977)『探究者 アナキズム教育論の源流』黎明書房。

—— (1801), *Thoughts occasioned by the Perusal of Dr. Parr's Spital Sermons, being a Reply to the Attacks of Dr. Parr; Mr. Mackintosh, the Author of an Essay on Population, and Others*, in *The Political and Philosophical Writings of William Godwin*, vol. 2, rep., William Pickering, 1993.

—— (1820), *Of Population. An Enquiry concerning the Power of Increase in the Numbers of Mankind, being on Answer to Mr. Malthus's Essay on that Subject*, rep., Augustus M. Kelley, 1964.

Malthus, T. R. (1798), *An Essay on the Principle of Population as it affects the Future Improvement of Society. With Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other Writers*, rep., in *The Works of Thomas Robert Malthus*, vol. 1, rep., William Pickering, 1986.

永井義雄訳(1973)『人口論』中央公論新社。

高野岩三郎・大内兵衛訳(1935)『ロバート・マルサス 初版人口の原理』岩波書店。

—— (1803), *An Essay on the Principle of Population; or, a View of its Past and Present Effects on Human Happiness; with an enquiry into our Prospects respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions*, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, rep., Routledge Thoemmes Press, 1996.

吉田秀夫訳(1971-72)『各版対照マルサス人口論』全4冊、春秋社。

—— (1817), *An Essay on the Principle of Population; or, a View of its Past and Present Effects on Human Happiness; with an enquiry into our Prospects respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions*, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, vol. 2, rep., Routledge Thoemmes Press, 1996.

吉田秀夫訳(1971-72)『各版対照マルサス人口論』全4冊、春秋社。

—— (1826), *An Essay on the Principle of Population; or, a View of its Past and Present Effects on Human Happiness; with an enquiry into our Prospects respecting the Future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions*, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, vol. 2-3, rep., William Pickering, 1986.

南亮三郎監修 大淵寛・森岡仁・吉田忠雄・水野朝夫訳(1985)『マルサス人口の原理第6版』、中央大学出版部。

Paul, C. K. (1876), *William Godwin: his Friends and Contemporaries*, vol. 1, pp.321-25, Henry S. King & Co.